

## 学位申請論文の審査結果の要旨

本審査委員会(以下、「委員会」と略称)は、京都府立大学学位規程 12 条に基づいて以下のとおり審査の内容を研究科会議に報告する。(なお、審査論文の内容については、「公開審査発表要旨」を参照されたい。)

### [経過]

委員会(森下委員、服部委員、村田委員)は、令和3年4月12日、4月20日、4月27日、6月7日に会議を行うとともに、6月9日から公開審査(最終試験)を実施した。公開審査については、学位申請者雨越康子の体調を考慮し、本人から提出された学位申請論文(以下、「論文」と略称)と発表要旨の書面をオンライン上で公開したうえで6月14日まで質問を受け付けた。審査委員3名と他1名からの質問および意見に対して、6月16日に書面での応答が提出、公開された。委員による論文評価および公開審査における質疑応答の概要は以下のとおりであった。

### [評価]

現在、大人による幼児に対する絵本の読み聞かせは、家庭や幼稚園、保育園などの施設で幅広く実施されている。その目的としては、親子で触れ合うことや、園の先生・保育士と心を通わせること、想像する楽しさを味わうことなど、情緒面での効果が強調されることが多かった。一方で、絵本の読み聞かせのもつ認知面の効果に関しては、言葉の習得を助けるという言語能力関連の期待が大きく、学術研究もそうした効果を検証するものが中心であった。これらの研究では、確かに絵本の読み聞かせが語彙力や読解力、言語運用能力などを向上させる可能性が示されてきたが、より広範な心的過程に関わる他の認知機能への効果はほとんど検討されてこなかった。また、子どもが5歳くらいになると家庭で読み聞かせが行われる頻度が低下することが知られており、幼稚園や保育園での集団読み聞かせのもつ役割や、子どもが独力で絵本を読む萌芽的読書(一人読み)の有効性も、実証的に検討されるべき重要な課題である。

このような研究動向を踏まえて、本論文は、語彙力だけでなく、様々な認知活動において情報の処理と保持を支えるワーキングメモリを取り上げ、幼児期の絵本の読み聞かせと一人読みがもつ効果について、調査と実験をもとに実証的に検討を行ったものである。特に以下の諸点について、学術的・応用的な見地から優れた研究であると評価することができる。

1. 本研究は、まず調査によって家庭での読み聞かせと認知能力との関連を明らかにした後、2つの介入実験により方法面での改良を加えながら集団読み聞かせのもつ認知能力への影響を調べ、最後に読み聞かせを補う家庭での一人読みの方法の有効性を検証している。大きな研究テーマに含まれる個別の課題を解明して行く流れにおいて各研究が有機的につながっており、ひとつのまとまりのある研究として完成されている。
2. 日本で十分に行われていない読み聞かせの認知面における効果に関する実証研究であ

るだけでなく、現在国内外での議論が続いているワーキングメモリトレーニングの有効性に関する実証研究の側面も備えていることから、複数の研究テーマにまたがる高い学術的価値が認められる。

3. 日本では保育・教育現場における長期的な介入研究が少ない中で、本論文はこれを複数行っている。そうした研究の実施に必要な現場との交渉、調整や信頼関係の構築の点、あるいは研究に要する時間や労力といったコストの点から考えても、非常に困難な課題に挑戦し達成している、貴重な実証研究であると見なし得る。

4. 研究の成果が具体的であり、とくに絵本の反復や付箋の使用といった読み聞かせの工夫は家庭や施設における実践で取り入れることが可能で、応用的な意義が大きいと考えられる。小学校以降での学力格差・低下が今日的な課題となっているが、語彙力やワーキングメモリの向上という観点から家庭と施設での読み聞かせの効果を検討した本研究は、これらの課題に取り組むうえでの貴重な学術的根拠を提供するものである。

以上の成果とともに、本論文は次のような課題を持つものである。

1. 第5章、第6章を介入研究として厳密に見た場合、剰余変数に対する統制と、効果の持続性の確認が十分ではない。例えば群間で施設や読み手そのものが違っているサンプルが含まれている点を統制したり、主要な剰余変数と考えられる各家庭の社会経済的地位、文化環境などについて事前に統制したり事後的に分析したりすることが望ましかった。また、ある程度時間をおいてから追跡調査を実施し、介入の効果の持続期間が確認されていれば、研究の価値がより高まったと考えられる。

2. 研究全体で、対象を就学前の幼児という大きな括りで扱っており、年齢や発達段階の細かい区分と対応づけた考察が不足している。参加児が何歳でどういった発達段階にあるかは心的過程や行動における様々な質的差異につながり得る要素である。こうした要素に関する知見をもとに、本研究の読み聞かせや一人読みの方法がどういった段階にある子どもに適したものであったか、より詳細に検討がなされるべきであった。

3. 本研究は読み聞かせや一人読みによって語彙力やワーキングメモリに向上が見られることを実証しているが、その機序を十分に検討しているとはいえない。心的能力は使えば向上するという単純なものではなく、トレーニング研究ではそこに関わるどの心的過程を、どのように刺激するかが大きな問題とされる。本研究では読み聞かせの効果の機序に関する考察が十分だとはいえ、語彙力やワーキングメモリ、あるいは脳に関する理論に基づき、この点について具体的に論じられるべきであった。

[公開審査の状況](敬称略)

6月9日に博士論文と発表要旨(添付)が書面で公開され、6月14日まで閲覧者からの質問を受け付けた。これらの質問に対する回答は、6月16日に書面で公開された。主な質問と回答の概要は以下のとおりである。

森下委員からの質問と指摘については、次のような応答があった。

①読み聞かせにおいて親や園の保育者、申請者本人といった読み手の違いの影響についての質問に対しては、先行研究が示すように親が読み手の場合の効果が高いと考えられるが、本研究では園の保育者と申請者の比較が中心で、申請者も長期間関わることで子ども

と関係を築いて実験していることが説明された。

②読み聞かせによる語彙力とワーキングメモリの向上が、それぞれの理論・モデルに照らしてどのように説明されるかとの質問に対しては、語彙力に関しては絵本の言葉が語彙のネットワーク形成に寄与して一般的な語彙力を増すと考えられること、ワーキングメモリに関しては視空間性ワーキングメモリは直接向上がもたらされるかもしれないが、言語性ワーキングメモリは語彙の向上などを通じた間接的な効果によるものかもしれないことが説明された。

③第5章と第6章の実験計画の違いに関連して、読み聞かせにおける絵本の反復と付箋の使用の効果について確認する質問に対しては、ふたつの章の反復あり・付箋あり群の結果の違いから、反復だけでなく付箋による記銘作業の効果を重視するとの回答があった。

④第7章で用いられたボカ・ペン絵本のもつデメリットに関する質問に対しては、これに任せきりになると情緒面での効果が得られにくいと考えられるため、コンスタントに親が関わる取り組みを加えることの可能性が述べられた。

次に、服部委員からの質問と指摘については、次のような応答があった。

①4歳児から5歳児にかけての質的变化を踏まえれば、言語理解がまだ難しい4歳児こそ研究対象とすべきであったのではとの質問に対しては、指摘に同意しつつ、実験課題に5、6歳の幼児に開発されたものが含まれることや、用語や指示が小さい子には難しいことからこの年齢の子を対象にしたとの説明がなされた。

②4、5歳頃の個人差が大きい時期に「読み聞かせてもらう」と「1人で読む」ことの意味の違いをどう考えるかとの質問に対しては、1人で読むよりも読み聞かせてもらう方が、コミュニケーションや情緒的なやり取りが存在し、正しく読めていない場合には補助も受けられることから、読み聞かせの重要性を強調する回答がなされた。

③子どもが絵や活字に触れる際に保護者が関わるべき目安について、「言語能力がある程度発達する」「小学校3年生くらいまで」とあいまいな量的表現の記述が見られるが、「抽象的な概念の獲得」といった質的变化と関連付けて書かれていれば説得力があったとの指摘については、これに同意するとともに、幼児向けの具体物中心のおはなしから、複雑な気持ちや概念を含む物語へと進むまでの大人の手助けの必要性が述べられた。

さらに、村田委員からの質問については、次のような応答があった。

①絵本の読み聞かせが子どもに対して様々な肯定的影響を及ぼす中で、あえてワーキングメモリを取り上げる意義についての説明を求める質問に対しては、小学校や保育園で働いた経験から、学力に問題のある子は小学校入学以前に原因があると感じたが、ワーキングメモリは主要な教科や教室内行動などに広範に関わっていることが示されており、幼児期からその能力を高めることの意義は大きいと考えられるとの説明がなされた。

②絵本の読み聞かせが有用であり、多くの幼稚園・保育園で実施されているにも関わらず、小中学生の読書時間の減少や活字離れが進んでいるという相反する現象をどう捉えるかという質問に対しては、自身の小学校教員としての読み聞かせ実践をもとに、適切な方法で長期間読み聞かせを継続することの必要性が述べられた。

③今後、幼稚園や保育園、家庭で行うことのできる絵本の読み聞かせ方法の提案について問う質問に対しては、幼稚園や保育園では本研究で用いた少しの工夫を取り入れてもらうこと、家庭ではボカ・ペン絵本のようなサポートになる装置を活用してもらうことが述

べられた。

また、審査委員以外の質問者として、石田正浩（本学公共政策学部准教授）からは以下のような質問と応答があった。

①読み聞かせる文章の内容の影響について確認し、効果的な読み聞かせに適した材料はどのようなものかを問う質問に対しては、絵本の題材が身近であることや、登場人物に感情移入ができることが幼児の熱心さにつながることを示す先行研究があること、および、本研究の記憶作業を伴う読み聞かせの場合は、繰り返し読んでも楽しいようなもの、物語性のあることも重要であるとの見解が述べられた。

②総合考察において「幼児期の早い時期から、毎日もしくは週3日以上の高い頻度でおこなうこと」が望ましいとする記述に関連して、第4章の調査結果における根拠と、最適な頻度の有無について確認する質問に対しては、発表要旨で割愛されたが論文に含まれている、読み聞かせを毎日行う群とほとんどしない群の2群間の差に根拠があることと、したがって頻度は高い方がいいと考えられるが毎日より少ない場合の効果の違いは明確ではないことが説明された。

③家庭での読み聞かせの効果に関して、読み聞かせ以外の要素、例えば読み聞かせが多い家庭は子どもとの関係が良好であったり、他の知的刺激が与えられていたりすることが影響しているのではないかと問う質問に対しては、本研究の結果の一部からもその可能性があることを認めるとともに、協力園との調整から保護者向けの質問項目を限定することになり十分な検討ができなかった事情が説明された。

#### [審査結果の報告]

委員会は、以上の審査委員による論文審査と公開審査を通じて、申請者の強い課題意識、一貫した論旨と研究の蓄積を確認するとともに、論文は公共政策学研究科「博士論文の審査基準」（2017年1月5日）における「博士学位論文の評価の基準」（下記参照）に照らしてその基準を達成していると判定した。したがって、委員会は申請者が博士（福祉社会学）の学位に値するものと判断する。

#### [博士学位論文の評価の基準]

- ①明確な問題意識に基づいて研究の意義や必要性が論じられた独創的なものであること。
- ②当該分野の先行研究を渉猟し、批判・評価の作業が十分になされていること。
- ③研究の目的に照らして適切な研究方法がとられ、学術論文として論旨が明快で論理的に明確な結論を導いていること。
- ④研究成果が国際的な学術水準および学際的な観点から重要性があり、社会的要請にも応える発展性を持つものであること。